

# 保育所で行う送迎対応の現状と ソーシャルワークの活用に関する一考察

——送迎時の関わりを子育て支援につなげていくために——

## An Examination of the Current State of Pick-Up and Drop-Off Support at Daycare Centers and the Utilization of Social Work

—To Connect Involvement during Pick-Up and Drop-Off with Child Rearing Support—

青木 隆男  
(Takao AOKI)

### Abstract :

To identify the challenges related to the current state of pick-up and drop-off support at daycare centers and the utilization of social work, a questionnaire survey was conducted. The survey results revealed the challenges posed by environmental factors during pick-up and drop-off times and the concerns of daycare providers towards children and parents. Additionally, situations where Biestek's seven principles could be applied in involvement with children and parents during pick-up and drop-off were presented. As a future challenge, the necessity of conducting workshops focused on social work to empower daycare providers was indicated.

**キーワード** : 保育所、送迎対応、子育て支援、ソーシャルワーク、バイステックの7原則

**Keywords** : Nursery school, Pick-up and drop-off support, Child rearing support  
Social work, Biestek seven principles

## 1. はじめに

### (1) 背景

子どもたちを取り巻く環境が複雑で多様化している現代では、保育所で働く保育者が担う役割も大きくなっている。保育士は児童福祉法第18条第4項において、「保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう。」と位置づけられており、子どもと関わるだけでなく、家庭が抱える問題や課題への対応など、保護者への支援も求められている。保育所保育指針解説

(2018)の第4章「子育て支援」には、「保育士等は、一人一人の子どもの発達及び内面についての理解と保護者の状況に応じた支援を行うことができるよう、援助に関する知識や技術等が求められる。内容によっては、それらの知識や技術に加えて、ソーシャルワークやカウンセリング等の知識や技術を援用することが有効なケースもある。」との記載があり、保育所においてもソーシャルワークの知識や技術が求められている。

また、第4章には「保育所における保護者とのコミュニケーションは、日常の送迎時におけ

る対話や連絡帳、電話又は面談など、様々な機会をとらえて行うことができる。保護者に対して相談や助言を行う保育士等は、保護者の受容、自己決定の尊重、プライバシーの保護や守秘義務などの基本的姿勢を踏まえ、子どもと家庭の実態や保護者の心情を把握し、保護者自身が納得して解決に至ることができるようにする。」との保育所の特性を生かした子育て支援の具体的場面が記されている。安藤（2009）は、「子どもと保護者、そして保育士の生活の場が重なり、保護者と環境との相互作用を把握できる場でのかわりが重要になる。保育所に勤務する保育士を考えた場合、三者がともに共有できる場は、保護者が送迎にくる時間帯の保育所ということになる。共有する時間的には非常に短くなるが、毎日のように継続的にかかわりがもてるという点では、かならずしも接点が少ないわけではない。」と述べており、保育所保育指針にも示されている「日常の送迎時における対話」は、保育所の特性である日々保護者と顔を合わせて継続的に支援を展開できる貴重な時間であるといえる。

## （2）課題

保育所における子育て支援の課題として、北澤・志濃原（2018）は、「保育所保育指針に保護者の支援が明記されてから、10年たった現在も「保護者への支援」という視点での方法論の確立や技術の習得に関しては、進んでいるとは言えない状況がうかがえる。保護者の多様なニーズを把握し、保護者の支援に繋げていくために、送迎時の受け入れ方法、人員配置、コミュニケーションの内容や方法、必要な技術の習得などを検討していく必要があるだろう。」と述べている。故に、送迎対応<sup>1)</sup>を行う際にも、確立されたコミュニケーションの内容や方法、必要な技術の習得が求められるといえるであろう。

## （3）コミュニケーションの内容や方法

松山（2017）は、「保育士にはソーシャルワークの視点から保育や相談援助を行うことが要請されている。」と述べており、ソーシャルワークの知識や技術を活かした子育て支援が必要であり、理論に基づいたコミュニケーション

を実践することで保護者の課題解決につながっていくといえよう。

また、理論に基づいたコミュニケーションの実践では、対人援助に関わる援助者の行動規範として知られている「バイステックの7原則<sup>2)</sup>」を1つの手法としてあげることができるのではないだろうか。吉浦・杉野（2022）は、バイステックの7原則に基づき保育実践をまとめており、「保育所の保育者が行う実践の中にはソーシャルワークの視点が含まれていること」「ソーシャルワークの視点を持った日々の保育実践が子どもと家庭を支えていること」が述べている。また、田邊（2021）は、「指針で示している多くの保育内容に関して、バイステックの7原則との整合性を見つけ出すことが出来、その手法を保育者が学ぶことによって、乳幼児が人間関係を育んでいく様々な関わりに応用していくことが可能である。」と述べており、保護者への子育て支援だけでなく、乳幼児に対してもバイステックの7原則に基づいた関わりが有効であるとの見解が示されている。

本研究では、保育所で働く保育者への質問紙調査を通して、保育者が抱える送迎時の悩みや現状を明らかにすると共に、ソーシャルワークの視点を持ったコミュニケーション技術の活用や習得について模索をしていく。

## 2. 研究の目的

本研究では、保育所で働く保育者に対して質問紙調査を行い、保育所での送迎対応の現状とソーシャルワークの活用に関する課題を明らかにしていく。また、質問紙調査の結果を通して、送迎対応にバイステックの7原則を援用していくことについても考察し、送迎時にソーシャルワークの知識や技術を活かしていくことの重要性について示すことを目的とした。保育者が抱える送迎対応の悩みを軽減させ、より良い保育実践につなげていく一助としたい。

## 3. 研究方法

### （1）調査方法

本研究では、保育所で働く保育者に対して質問紙調査を行い、保育所での送迎対応の現状とソーシャルワークの活用に関する課題を調査

した。

研究の手順として、研究者から質問紙調査について施設長に主旨・内容を伝え、施設長から職員に口頭・書面にて周知を行い、調査協力者を募った。調査協力者から同意を得た後、Google formの調査機能を用いて「質問紙調査」を実施した。

質問紙調査は入力 of 所要時間は5分程度で、無記名式調査で行い、質問紙の選択式の項目については単純集計と一部の回答を属性とのクロス集計により分析を行った。また、自由記述形式の質問については、調査協力者の回答をできる限り用いた上で、要約や一般的な言葉に置き換える等のデータ処理を行った。その後、類似したデータを分類して、カテゴリーごとに整理・分析をした。

## (2) 調査対象と期間

東京都にある社会福祉法人が運営するA保育所(0歳～就学前:定員100名)の保育者を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施した。

調査期間は、2023年8月8日(火)～2023年8月22日(火)として、協力者に対して1人1回の質問紙調査を実施した。

## (3) 質問紙の概要

質問紙調査の項目として、「属性」(年代/経験年数/保有している資格)の3項目、「送迎対応の実践について」(保育所の送迎対応をどれくらいの頻度で行っていますか/送迎時の保護者との関わりを重要だと思いますか/送迎時に保護者から相談を受けたことはありますか/送迎対応で保護者と関わる際に、難しい・困ると感じることはありますか/自らが行う送迎時の関わりが子育て支援につながっていると思いますか)の5項目、「ソーシャルワークについて」(ソーシャルワークのことを知っていますか/バイステックの7原則のことを知っていますか/保育を行う上でソーシャルワークの知識や技術は必要だと思いますか/ソーシャルワークがテーマの研修・勉強会に参加したことはありますか/保育実践を行う上で、自ら意識的にソーシャルワークの知識や技術を活用していると思いますか)の5項目、計13項目の質問を

選択式で回答できるよう設定した。

また、送迎対応の実践についての「送迎対応で保護者と関わる際に、難しい・困ると感じることはありますか。」の1項目については、「ある」と回答した者が自由記述形式で具体的な内容を記入できるよう設定した。

## (4) 倫理的配慮

個人情報の適切な管理においては、外部への流出を防止することのみならず、情報の紛失・破壊・外部からの不正なアクセス等の危険に対して安全対策を実施し、調査対象者の個人が特定されないよう保護・配慮を行った。

調査は、質問紙調査に参加しない・質問に答えられないことで、不利益が生じることはないことを説明・同意を得て実施した。また、調査の実施に先立ち、「人文社会科学系研究倫理審査委員会」による倫理的な審査・承認を得た(承認番号:23人-014)。

## 4. 結果

### (1) 質問紙調査の実施結果

A保育所で保育を行う保育者(常勤・非常勤問わず)に対して質問紙25件を配布し、19件の回答が得られ、回収率は76%となった。

### (2) 対象者属性

延べ19件の回答のうち属性の内訳は表1の通りであった。

年代が「50代以上」6名(31.6%)と最も多く、経験年数では、「1年～5年未満」6名(31.6%)、「5年～10年未満」6名(31.6%)、「10年以上」7名(31.6%)と大きな差はなかった。また、保有している資格では、「保育士」14名(73.7%)となり、協力者の7割以上が保育士資格を取得している結果となった。

### (3) 送迎対応の実践についての回答

送迎対応の実践についての質問に関する結果は表2の通りであった。

「保育所の送迎対応をどれくらいの頻度で行っていますか」の質問では、一番回答が多かったものは「毎日行っている」10名(52.6%)となった。「送迎時の保護者との関わりを重要

表1 属性について

n=19

質問項目	選択肢	回答数	%
年代	20代	3	15.8
	30代	5	26.3
	40代	5	26.3
	50代 以上	6	31.6
経験年数	1年～5年未満	6	31.6
	5年～10年未満	6	31.6
	10年以上	7	36.8
保有している資格（複数回答可）	保育士	14	73.7
	幼稚園教諭免許状	7	36.8
	保有していない	5	26.3

表2 送迎対応の実践について

n=19

質問項目	選択肢	回答数	%
保育所の送迎対応をどれくらいの頻度で行っていますか（子どもの受け渡し以外の関わりも含む）	毎日行っている	10	52.6
	1週間に2～3回	5	26.3
	1週間に1回程度	2	10.5
	行っていない	2	10.5
送迎時の保護者との関わりを重要だと思いますか	重要だと思う	19	100
	多少は重要だと思う	0	0
	あまり重要だと思わない	0	0
	重要ではない	0	0
送迎時に保護者から相談を受けたことはありますか	ある	17	89.5
	ない	2	10.5
送迎対応で保護者と関わる際に、難しい・困ると感じることはありますか	ある	15	78.9
	ない	4	21.1
自らが行う送迎時の関わりが子育て支援につながっていると思いますか	つながっていると思う	6	31.6
	多少はつながっていると思う	13	68.4
	あまりつながっていると思わない	0	0
	つながっていない	0	0

だと思いませんか」については、送迎対応を行っていない保育者も含めた19名（100%）全員が「重要だと思う」と回答した。

また、「送迎時に保護者から相談を受けたことはありますか」の質問には、17名（89.5%）が「ある」と答え、「送迎対応で保護者と関わる際に、難しい・困ると感じることはありますか」では、15名（78.9%）が「ある」と回答をした。多くの保育者が送迎の際に保護者から相談を受け、送迎対応を難しいと感じることがあるとい

う結果であった。

「自らが行う送迎時の関わりが子育て支援につながっていると思いますか」の質問では、「つながっていると思う」6名（31.6%）、「多少はつながっていると思う」13名（68.4%）との回答になり、回答者全員が送迎時の関わりが子育て支援につながると考えている結果となった。

(4) 送迎時に難しい・困ると感じること (自由記述)

「送迎対応で保護者と関わる際に、難しい・困ると感じることはありますか」に「ある」と答えた15名(78.9%)から自由記述形式で、送迎時に難しいと感じることや悩みについて回答を得ることができた。自由記述の内容は、調査協

力者の回答をできる限り用いた上で、要約や一般的な言葉に置き換える等のデータ処理を行い、カテゴリーごとに整理・分析を行った。カテゴリーは、「子どもへの対応」「保護者への対応」「人員配置について」「受け入れ方法について」「保育者が抱えている悩み」の5項目が生成された(表3)。

表3 送迎対応の際に難しい・困ると感じること

カテゴリー	自由記述の内容
子どもへの対応	入室を嫌がり激しく泣く際の関わり
	子どもがなかなか帰ろうとしない
	保護者を叩く・暴言を吐くなどの姿が見られる時の対応
	体調や機嫌が悪い時の子どもとの関わり
	イヤイヤ期の子どもが泣いている際に声掛けをするかどうか悩む
	お迎えが来るとわざと困らせるような行動をして保護者の気を引こうとする
保護者への対応	精神的に不安定な保護者と関わる時
	感情的になっている方との話し合い
	保育に対してのクレーム対応
	人見知りの保護者に対する関わり
	保護者の体調や機嫌が悪い日にどのような関わりをするか悩む
	子どもや職員に対して強い口調で対応してくる 仕事で忙しそうにしている時
人員配置について	他クラスの保護者に相談や質問され、内容によって直ぐに応えられないことがある
	相談を受けた際も保育中は目を離せず、しっかりと答えることが難しい
	自分では判断しかねることを聞かれた時の対応
	その日あった出来事などを保護者に伝える時、他の受け入れもあるため対応が難しいことがある
受け入れ方法について	病欠明けの受け入れ時に行う体調の確認
	迎え直前の高熱で明日の登園を控えてもらうかの判断
	微熱がある時
	明らかな体調不良があるときにも登園してしまう
	お迎えの時間を守らない
	体調が悪そうな時にも預けようとする (じんましん、鼻水、ひどい咳、寝不足で不機嫌など)
保育者が抱えている悩み	育児困難家庭に対してどのように関わって良いかわからない
	自分が独身で出産経験や子育て経験がないため、どうしても薄っぺらい内容になってしまう
	関係性が築けていない保護者だと、こちらの発言がどのように解釈されるかわからないため対応が難しい
	子育て経験がないため、自分が話した内容に不満を持たれないか心配
	保護者が休みであろう時に登園し、降園予定も遅い時どのような声掛けをするか悩む
	保護者の聞きたい事に答えられているか不安

## (5) ソーシャルワークについての回答

ソーシャルワークについての質問に関する結果は表 4 の通りであった。

「ソーシャルワークのことを知っていますか」の質問では、「知っている」6名(31.6%)、「なんとなく知っている」11名(57.9%)となり、89.5%がソーシャルワークのことを知っているという結果になった。しかし、「バイステックの7原則のことを知っていますか」の質問では、「聞いたことはあるがわからない」7名(36.8%)、「全くわからない」9名(47.4%)となり、84.2%がバイステックの7原則のことをわからないと回答する結果であった。

次に、「保育を行う上でソーシャルワークの

知識や技術は必要だと思いますか」の質問では、「必要だと思う」10名(52.6%)、「多少は必要だと思う」8名(42.1%)となり、94.7%が必要だと回答しているが、「ソーシャルワークがテーマの研修・勉強会に参加したことはありますか」の質問では、「ある」5名(26.3%)となり、70%以上が研修に参加したことがないという結果となった。また、「保育実践を行う上で、自ら意識的にソーシャルワークの知識や技術を活用していると思いますか」の質問では、「活用している」1名(5.3%)「多少は活用している」4名(21.1%)となり、ソーシャルワークの知識や技術を活用していると思っている保育者は26.4%という結果となった。

表4 ソーシャルワークについて

n=19

質問項目	選択肢	回答数	%
ソーシャルワークのことを知っていますか	知っている	6	31.6
	なんとなく知っている	11	57.9
	聞いたことはあるがわからない	2	10.5
	全くわからない	0	0
バイステックの7原則のことを知っていますか	知っている	2	10.5
	なんとなく知っている	1	5.3
	聞いたことはあるがわからない	7	36.8
	全くわからない	9	47.4
保育を行う上でソーシャルワークの知識や技術は必要だと思いますか	必要だと思う	10	52.6
	多少は必要だと思う	8	42.1
	あまり必要だと思わない	1	5.3
	必要ない	0	0
ソーシャルワークがテーマの研修・勉強会に参加したことはありますか	ある	5	26.3
	ない	14	73.7
保育実践を行う上で、自ら意識的にソーシャルワークの知識や技術を活用していると思いますか	活用している	1	5.3
	多少は活用している	4	21.1
	あまり活用していない	10	52.6
	活用していない	4	21.1

## 5. 考察

### (1) 送迎対応の現状と課題について

質問紙調査では、「送迎時の保護者との関わりを重要だと思いますか」の質問に調査協力者全員が「重要だと思う」と回答した。その結果から「年代」「経験年数」「保有している資格」を問わず、送迎対応のことを重要であると認識していることがわかった。青木（2021）は、「様々な職員が送迎対応をする保育所では、多角的な視点で子どもや保護者を見ることができると言え、自身の気付きを伝達・共有することが重要である。」と述べている。故に、日々の送迎対応を通して、保育者が多角的な視点で子どもや保護者の些細な変化に気付き、情報を共有していくことで、より質の高い子育て支援につながっていくといえるだろう。しかし、「送迎対応で保護者と関わる際に難しい・困ると感じることはありますか」の自由記述には、「相談を受けた際も保育中は目を離せず、しっかりと答えることが難しい」「他クラスの保護者に相談や質問され、内容によって直ぐに答えられないことがある」などの人員配置や受け入れ方法といった環境的要因が影響する悩みがあげられていた。現場の保育者が送迎対応の重要性を認識していても、環境的要因により対応が難しくなっている現状があるといえる。これらの課題には、「現在の保育士の配置基準では対応が難しい」「クラス担任が早番・遅番を利用する保育時間の長い利用者への対応ができない」などの要因が影響しているとも考えられる。今後、送迎対応の充実に向けて、保育者だけが抱える問題にせず、雇用や制度などを含めた様々な視点から議論をしていく必要があるといえよう。

### (2) 送迎対応にバイステックの7原則を活用していくことについて

質問紙調査の「送迎対応で保護者と関わる際に難しい・困ると感じることはありますか」の自由記述には、子ども・保護者との関わりについての悩みや保育者自身が抱えている悩みが多くあげられていた。今回記述されていた悩みについて、バイステックの7原則を活用することができるか考察をしていく。

「子どもへの対応」のカテゴリーでは、「入室

を嫌がり激しく泣く」「わざと困らせるような行動をして保護者の気を引こうとする」などの子どもとの関わり方についての悩みがあげられていた。このような場面でもバイステックの7原則に基づいた関わりは有効であると考えられる。入室を嫌がり激しく泣く場面では、感情表現の自由を認めて関わることを尊重するバイステックの7原則の1つである「意図的な感情の表出の原則」を活用できると推察する。また、わざと困らせるような行動をして保護者の気を引こうとする場面では、決して頭から否定せず、どうしてそういう考え方になるのかを理解しようとする「受容の原則」が活用できるといえるだろう。このように送迎時の子どもとの関わりでバイステックの7原則が援用できるといえよう。

また、「保護者への対応」のカテゴリーでは、「精神的に不安定な保護者との関わり」「子どもや職員に対して強い口調や態度を取る」などの困りごとがあげられていた。精神的に不安定な保護者と関わる場面や子どもや職員に対して強い口調や態度を取る場面では、保育者自身が利用者の感情に呑み込まれないようにする考え方である「統制された情緒的関与の原則」が有効であるといえるだろう。さらに、保護者の不安や怒りなどの感情を尊重する「意図的な感情の表出の原則」の活用もできるのではないだろうか。保護者への対応でもバイステックの7原則の援用が効果的であるといえるよう。

次に、「保育者が抱えている悩み」のカテゴリーでは、「保護者が休みであろう時に登園し、降園予定も遅い時どのような声掛けをするか悩む」「子育て経験のないため、自分が話した内容に不満を持たれないか心配」などがあげられていた。「保護者が休みであろう時に登園し、降園予定も遅い時どのような声掛けをするか悩む」という場面では、相手の行動や思考に対して善悪を判断しないとする考え方の「非審判的態度の原則」が活用できると推察した。そして、「子育て経験がないため、自分が話した内容に不満を持たれないか心配」という悩みには、バイステックの7原則についての知識・技術を習得していくことで、自身が行う送迎対応にも自信を持っていけると考える。子育ての経験がなく

とも、理論に基づく専門的な実践を行うことで、保護者との関わりでの心配を軽減させることもできるのではないだろうか。

このように送迎対応の様々な場面でバイステックの7原則を援用することができると思う。さらに、今回は事例としてあげることがなかった他の場面でもバイステックの7原則の知識・技術を活かしていくことができるであろう。ソーシャルワークの知識と技術を学び、実際に活用していくことで、子どもや保護者と円滑にコミュニケーションを取り、信頼関係を築いていくことができると推察する。理論と実践を融合させた日々の送迎対応が、子ども・保護者との信頼関係の構築へとつながっていくといえるだろう。

### (3) ソーシャルワークの勉強会実施の必要性について

今回の調査では、「ソーシャルワークがテーマの研修・勉強会に参加したことはありますか」の質問で73.7%が「ない」と回答し、ソーシャルワークをテーマとした研修会に参加することがない保育者の方が多いという結果になった。また、「保育を行う上でソーシャルワークの知識や技術は必要だと思いますか」の回答では、「必要だと思う」「多少は必要だと思う」の合計が94.7%となり、多くの保育者がソーシャルワークの知識や技術は必要だと思っていることもわかった。吉浦・杉野(2022)は、「保育者による無意識のソーシャルワーク実践から意識的で意義のあるソーシャルワーク実践へと展開されることを期待したい。」と述べており、意識的な実践を行うためにソーシャルワークの知

識・技術を得ておくことが重要であるといえる。これらの結果から、保育所で働く保育者に対してソーシャルワークをテーマとした研修会を実施する必要性があると考えた。

また、質問紙調査では、「ソーシャルワークのことを知っていますか」の回答が「知っている」「なんとなく知っている」を合わせて89.5%となり、ソーシャルワークの認知度は高かったことに対して、「バイステックの7原則のことを知っていますか」の回答は「知っている」「なんとなく知っている」を合わせて15.8%となった。さらに、バイステックの7原則のことを「知っている」「なんとなく知っている」を「知っている群」、「聞いたことはあるがわからない」「全くわからない」を「知らない群」に分け、属性の年代「20代」と「30代」を合わせた「20～30代」、「40代」と「50代以上」を合わせた「40代以上」をクロス集計した。クロス集計では、「知らない群」が「20～30代」87.5%、「40代以上」81.8%となり、各年代でバイステックの7原則の認知度が低い結果となった(表5)。

これらの調査結果から、研修会では、保育現場で活かすことのできるソーシャルワークの知識・技術を取り上げ、研修会を通して全年代の保育者に対してバイステックの7原則について学習・再確認する機会を作ることが必要であるといえよう。送迎時の環境を整えることに加え、全ての保育者がソーシャルワークの知識や技術を活用して保育を展開していくことが求められ、意識的な保育実践がより良い子育て支援につながるといえるであろう。

表5 バイステックの7原則のことを知っていますか

n=19

属性(年代)	知っている群	知らない群	合計
20～30代	1 (5.3%)	7 (36.8%)	8 (42.1%)
40代以上	2 (10.5%)	9 (47.4%)	11 (57.9%)
合計	3 (15.8%)	16 (84.2%)	19 (100%)



## 6. おわりに

本研究では、質問紙調査を通して、保育所での送迎対応の現状と課題を示し、ソーシャルワークの知識・技術の活用について考察を行った。また、考察の中では、保育現場で活かすことのできるソーシャルワークの知識・技術を取り上げた研修会の実施の必要性を提示した。今後の研究では、実際に保育者への研修会を実施し、保育者の専門性をより向上させていきたいと考えている。また、研修会では、杉野（2019）が「保育者の研修等では、「ソーシャルワーク技術の向上を目的とした研修」も必要だが、同時に「ソーシャルワーク意識の顕在化を目的とした研修」の実施も重要だと考える。その顕在化のなかで、自身の保育実践にソーシャルワークが含まれていることを認識できるよう保育者へエンパワメントアプローチを行っていくこと、それが保育者の実践力の向上につながるという。」と述べているように、自身がこれまで行ってきた「保育実践」と「理論」を融合させ、保育者が保育に対して自信を持ち、自らをエンパワメントしていく機会にもしていきたいと考えている。

最後に、本研究の質問紙調査は1つの施設を対象に行った調査となり、標本数が少なく限定的であり、有意性があるとはいえ本研究の限界と言える。今後は、より多くの保育者を対象に調査を行い、標本数を増やして有意性がある研究結果を保育現場に還元していきたいと考えている。引き続き、送迎時の関わりを子育て支援につなげていく方法や保育実践におけるソーシャルワークの活用方法について模索をしていきたい。

## 謝辞

ご多忙の中、調査にご協力いただきましたA保育所の職員の皆様には心から感謝申し上げます。

## 【脚注】

### 1) 送迎対応の定義付け

保育所の送迎時は、子どもの受け入れや引渡しをするだけでなく、保育者が子ども・保護者と顔を合わせて連続性を持ったコミュニケーションを取ることができる貴重な機会である（安藤 2009）。また、保育所保育指針解説（2018）では、保護者との送迎時のコミュニケーションについて、「気持ちよい挨拶や励ましの言葉がけを行う」「子どもの発達や行動の特徴、保育所での生活の様子を共有する」「保護者の状況の把握」「家庭の状況や問題を把握する」「保護者からの相談を受け、支援を行う場」などが述べられている。本研究では、上記の保育者が送迎の際に行う内容を「送迎対応」と定義付けることとした。

### 2) バイステックの7原則

アメリカの社会福祉学者のバイステックが定義した7つの相談援助技術であり、対人援助に関わる援助者の行動規範として知られている。原則として、①個別化の原則、②意図的な感情の表出の原則、③統制された情緒的関与の原則、④受容の原則、⑤非審判的態度の原則、⑥自己決定の原則、⑦秘密保持の原則の7つがあげられる。

## 【引用・参考文献】

- 厚生労働省編（2018）『保育所保育指針解説』フレーベル館。
- 安藤健一（2009）「保育ソーシャルワークに関する一考察～保育士による生活場面面接の可能性～」『清泉女学院短期大学研究紀要』27. 1-11.
- 北澤明子・志濃原亜美（2018）「保育所における保護者支援の現状と課題 ①—保護者へのアンケートより—」『秋草学園短期大学紀要』35. 139-151.
- 松山郁夫（2017）「ソーシャルワークにおける面接形態が親支援に及ぼす影響に対する保育を学ぶ学生の見解」『佐賀大学教育実践研究』35. 13-20.
- F・P・バイステック（2006）『ケースワークの原則 [新訳改訂版] 援助関係を形成する技法』誠信書房。
- 武田建・津田耕一（2016）『ソーシャルワークとは何か バイステックの7原則と社会福祉援助技術』誠信書房。
- 吉浦朱音・杉野寿子（2022）「保育所でのソーシャルワーク実践—日常の子育て支援からの考察—」『保育ソーシャルワーク学研究』8. 45-57.
- 田邊哲雄（2021）「保育の5領域「人間関係」と相談援助技術の関係性について」『湊川短期大学紀

- 要』57. 51-56.
- 青木隆男（2021）「保育所の送迎対応での気付きを支援につなげていくための一考察」『社大福祉フォーラム報告資料集』59. 61-64.
- 杉野寿子（2019）「保育者のソーシャルワークに関する意識調査からの一考察」『福岡県立大学人間社会学部紀要』27(2). 89-98.